

## 万国博覧会研究の最近の動向 —グローバル化と大博覧会—

東田 雅博

### はじめに

「博覧会だの、世界見本市だの、何だのと世間は騒いでいるがね」と、その老紳士は言った、「昨今では大はやりでも、わざわざその手のものを物見遊山に行こうとは思わんな。わたしの心に強い印象を刻みつけて、いつまでもいつまでも色褪せることがない博覧会は、ただ一つ。そのたぐいの、そもそもの元祖—ロンドンはハイド・パークで開かれた一八五一年の大英博覧会を措いてない。今じゃもう時代物になっちまったがね。しかし当時、われわれは人生も花の盛り。それがどれくらい目新しく映ったかは、近頃の若い世代にはとても実感できないだろうな。・・・南ウエセクスにとっちゃ、この年はいろんな面で、時代の最前線というべきか、まあ日付変更線みたいなことになって、いうなればそこに、時の断崖が生じた。つまり地質学にいうところの”断層”のように、いきなり、古代と現代が鉢合わせしたんだよ。・・・」<sup>①</sup>

1893年5月に発表されたトーマス・ハーディの短編「リール舞曲をひくフィドル弾き」の冒頭の一節である。これはある老人の1851年に開催された、初めての万国博覧会とされる大博覧会 The Great Exhibition of the Works of Industry of All Nations の思い出話であるが、ここに見られるような博覧会といえは1851年の大博覧会のことであり、その大博覧会が19世紀における一大転換期であったとの認識は、この時代の多くの人々が共有したものであり、万博史研究にも大きな影響を与えてきた。

この大博覧会についての研究は、1851年の大博覧会の時点から今日に至るまで、1951年や2001年の節目の年を中心に、積み重ねられてきた。その数は膨大なものである。本稿はこの大博覧会を中心にして万博研究の動向をまとめてみようとするものであるが、とくに最近の研究を中心にまとめてみたい。というのも、つぎに挙げるように最近立て続けといってもいいくらい次々と万国博覧会、とりわけ1851年のいわゆる大博覧会についての研究が出版されているからである。また、わが国では、各種国際博や万博の研究はあるが<sup>②</sup>、研究動向はほとんど見かけないからでもある<sup>③</sup>。

Paul Young, *Globalization and the Great Exhibition: The Victorian New World Order*, 2009.

Jeffrey Auerbach & Peter.H.Hoffenberg, (eds.), *Britain, the Empire, and the World at the Great Exhibition of 1851*, 2008.

James Buzard, Joseph W. Childers, and Eileen Gillooly, (eds.), *Victorian Prism: Refractions of the Crystal Palace*, 2007.

Jonathan Meyer, *Great Exhibitions: London, New York, Paris, Philadelphia*, Antique Collectors' Club, 2006.

Hermione Hobhouse, *The Crystal Palace and the Great Exhibition: art, science and productive industry: a history of the Royal Commission for the Exhibition of 1851*, 2002.

Michael Leapman, *The World for a Shilling: How the Great Exhibition of 1851 Shaped a Nation*, 2001.

Louise Purbrick, (ed.), *The Great Exhibition of 1851: New Interdisciplinary Essays*, 2001.

Peter H. Hoffenberg, *An Empire on Display*, 2001.

すべて網羅したというわけではないが、今世紀に上梓された万博や各種国際博覧関係の研究である。2001 年は大博覧会の 150 周年であるから、その前後で多いのは分かるが、それにしても注目すべき多さではあるまいか。その背後に何かありそうな気配がするのである。そこに何かがあるのかを考えながら、これらの国際博覧会や万博の研究史をまとめてみよう。

とはいえ、先の引用文にもあったように 1851 年の大博覧会はいわば特権的な地位を与えられており、やはり初めての万博とされる大博覧会についての研究が多い。それゆえ、先にも述べたように、小稿でも大博覧会を中心に研究動向を整理していくことになる。

## 注

① 井出弘之編訳『ハーディ短編集』、岩波文庫 2002 年、131-132 頁。

② 吉田光邦『改訂版万国博覧会』、NHK ブックス 1985 年、吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』思文閣出版 1985 年、吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版 1986 年。これらは日本を中心に万博を捉えているが、西洋史プロパーの研究としてはつぎを見よ。松村昌家『水晶宮物語 ロンドン万国博覧会 1851』リプロボート 1986 年、川本真浩「一九世紀後半イギリスにおける国際博覧会の変貌 ―リヴァプール国際博覧会(一八八六年)の歴史的意義―」『海南史学』41 号、2003 年。

③ 新しいところではつぎの文献ぐらいか。伊藤 真実子「博覧会研究の動向について ―博覧会研究の現在とその意義―」『史学雑誌』第 117 編第 11 号、103-111 頁。この動向は日本での博覧会研究を主とするもので、欧米での研究動向はその前提として 2 頁ほどで簡単に紹介されているだけである。

## 1, 20 世紀までの研究動向

まず、20 世紀末までの研究動向を簡単にまとめておこう。簡単にというのは、20 世紀末までの万博関係の研究は膨大なものがあり、それらにすべて触れるというのは筆者の手に余ることであり、また今回は 21 世紀の研究を中心にするすることでもあり、20 世紀末まではさほど詳しくなくてもよいであろうと思われるからである。とはいえ、当然だがポイントは外さないように心がけるつもりである。

文献としては当然だが、1851 年の時点からある。ここでは、1951 年が大博覧会の 100 周年で、この頃に多くの文献が出版されているので、この頃から始めることにしよう。

「大博覧会の重要性について言えば、無である。それは国際的平和をもたらさなかったし、趣味を改善することもなかった。それは少しは自由貿易を促進したと言えるかもしれない。少数の工業家たちが彼らの外国のライバルから少しは教訓を学んだかもしれない。ラッセル内閣とアルバート公がそれから僅かばかりの人気を拾い集めることができたかもしれない。だが、それは何よりも豪華なショーにすぎなかった。膨大な量の展示品が奇妙に美しい建物に集められ、600 万人の人々がそれらを見物にやってきた。大博覧会が終わったとき、ふたつのものが残された。その建物と巨額の財政的余剰である。ショーそのものは、10 月後半のコシュートの到着と 12 月のルイ・ナポレオンのクーデターの興奮によって人々の記憶から消え去った」<sup>①</sup>。

この一節は、奇しくも「奇妙に美しい建物」(大英博覧会の会場となった水晶宮＝クリスタルパレス)炎上直後の 1937 年に出版されたホブハウス Christopher Hobhouse の著書『1851

年とクリスタルパレス』からのものである。大博覧会をまったく評価しようとせず、それはまことにはかない、一時的な興奮を呼び起こしたショーにすぎないと断じている。ここには、大博覧会への憎しみさえ感じてしまう。ホブハウスの著書に掲載されているクリスタルパレスが炎上する写真を見てみると、かれがクリスタルパレスが焼け落ちたのが清々したと思っているのかとさえ想像したくなる。

先のハーディの短編の冒頭部に見られたように、19世紀の後半には大博覧会の評価は極めて高かった。しかし、20世紀にはいと流れは変わった。ヴィクトリア女王死後、大博覧会とそれを生み出したヴィクトリア時代への風当たりが次第に強くなったのである。このホブハウスの著書のほぼ20年前には、フロレンス・ナイチンゲールなどのヴィクトリア朝を代表する人々を偶像破壊的に描き、大いに物議を醸しだしたリットン・ストレイチーの『ヴィクトリア朝偉人伝』(1918年)が出版されていた。反ヴィクトリア朝主義の嵐が吹き荒れていたのである。ここに紹介した一文はその流れに棹さして大博覧会に毒づいているのである。

1951年の英国祭Festival of Britainは、もちろんこうした流れに影響されていた。したがって、この英国祭は元来は大博覧会の100周年を祝う行事でありながら、大博覧会の記念祝典であるよりは、むしろ労働党政府の業績の賛美と第二次世界大戦からの回復を示すものとなったのである。そもそも大博覧会を支えた価値観が、英国祭を主催した労働党政府の価値観にそぐわなかったのである<sup>②</sup>。

ヴィクトリア時代のデザインの評価に関して後々まで多大な影響を与えることになったイギリスの高名な美術史家ニコラス・ペプスナーNikolas Pevsnerの著作はこうした雰囲気をよく伝えている。ペプスナーは、大博覧会の建築、つまりクリスタルパレスはそれなりに評価しつつも、そこに展示された品々についてはヴィクトリア朝人士の趣味の悪さを示すものと断じる。つぎの一節に彼の評価は集約されている。

「大博覧会はすべての国の産業製品を展示するものであった。海外からの入場者はどれもどの国が産業を牽引しているかについて疑うことはなかっただろう。運河、道路、蒸気船、鉄道建設においていかなる国もイギリスには勝てなかった。イギリスにおいて最初の大工場が建設され、最初の大工業都市が出現した。それはまったくもって印象的なことであったが、その多くは見る人の心が洗われるようなものではなかった。・・・建築とデザインにおける審美的価値の評価には訓練と時間を要する。絵画と彫刻の情緒的価値の認識も主旋律に耳を傾け、魅了されることが必要である。だが、機械や会計事務所に気を取られている人間にはこうしたことは期待できない。・・・子供を面白がらせたものが、大金を手にした大の大人にも受けたのだと言えよう」。「しかし、コールとかれの友人たちはその熱情と才能を注いだにもかかわらず何もし得なかった。1862年博覧会の基準は同じように混乱していたし、その趣味は同じように慢心させるようなものであった」。「変化はウィリアム・モリスとともに始めて起こった。ただモリスが偉大な人物だったからである」<sup>③</sup>。

コールとは、アルバート公とともに大博覧会の開催に尽力したヘンリー・コールのことだが、こうした彼の厳しい評価が、これ以降のヴィクトリア時代、とくにそのデザインの評価にマイナスの影響を与え続けることになった。そういう意味で、彼の小冊子は大博覧会史研究において大きな意味を持つものである。

しかしながら、先に触れたリットン・ストレイチーに代表される反ヴィクトリア朝主義

はこの英国祭の頃にほぼ終焉する。ペプスナーはこの流れの、最後尾に位置するといえる。この頃からヴィクトリア時代への態度は変わり始めるのである<sup>④</sup>。

やはり1951年に出版された王立芸術協会のルックハーストKenneth W. Luckhurstの万博の通史は、この頃から見られたヴィクトリア時代をむしろそれなりに評価しようとする動きを反映している。ついに1851年の5月1日が来た。「その時には千年王国が出現したようであった。歴史上初めて世界の国々が自発的に平和的目的で団結し、魔法の輝きを発する一つの屋根の下で彼らの生産物の中で最も立派で美しいものが集められた。・・・われわれは、わが国をこれまでにない最高の国民的繁栄と国際的威信にまで高めたのはヴィクトリア朝の人々であることをようやくなんとか認め始めている」<sup>⑤</sup>。この一文は、反ヴィクトリア朝主義から「親ヴィクトリア朝主義」への転換期に当たる、この時代の雰囲気をよく伝えていて興味深いものである。万博史研究としては、本書は、1851年の大博覧会を20世紀前半までの国際博覧会の歴史の中で位置づけようとしている。

1955年に出版されたA・ブリッグズの『ヴィクトリア朝の人々』になると大博覧会の祝祭的な捉え方に戻っている。かれは、「1851年という年は、一九世紀のイギリスを通観するのに極めて好都合な時点としての条件を備えている。・・・そのような評価を下す機会は、まさに1851年という年を支配した大博覧会によって与えられた。・・・水晶宮は・・・人類の進歩を意気揚々と目に見える形で明示した。・・・大博覧会の目的はイギリス製造業の優位性を確立し、自由貿易と世界平和の福音を宣言することのみならず、イギリス国制の素晴らしさを外国の人々に明示することでもあった」、という。このように、ブリッグズは大博覧会が開催された1851年を一大分岐点として捉え、大博覧会の開催を「自己満足のムード」を象徴する出来事として捉えた。ところが、他方で、かれは、ディズレーリーにとっては、大博覧会は「政府に対する神の賜であり、・・・そのおかげで彼らの大きなしくじりから大衆の注意がそらされた」のであった、という。大博覧会が1851年にもっていた政治的意味を見逃してはいないのである。ただ「政治的野心という刺激にそれほど関心を持たない人たちにとっては、大博覧会は国民的な大祝祭であった」、のである<sup>⑥</sup>。

バランスよく大博覧会をヴィクトリア中期の社会状況の中に位置づけているといえるが、大博覧会そのものの捉え方については、後に手厳しい批判を受けることになる。

国際博覧会での「原住民村」などの展示を明るみに出し、国際博覧会と帝国主義との関係を徹底して暴いたグリーンハルPaul Greenhalghの著作は、これまでの、主催者や彼らを支持するジャーナリズムの宣伝を鵜呑みにしたような研究とはまるで趣の異なるものであり、万博研究史に決定的に重要な影響を与えた。

グリーンハルは言う、「1851年以降、帝国は誇らかに、かつ徹底的に展示された。・・・1851年から1940年にかけて、博覧会での帝国への関与は決してゆるむことはなかった。強調点が変わったにすぎなかった」、と。そして、「博覧会は帝国を栄光あるものとすると同時に、帝国を馴致しなければならなかった」<sup>⑦</sup>。

このグリーンハルの著作のあとがきは実に印象的である。

「だが結局の所、国際博覧会は、その肯定的な側面をもってしても拭い去ることが出来ない困惑をわれわれに残す。その理由は二つある。ひとつは、こうした壮大な観念が極めて否定的な意図を内に秘めて計画され得たというやるせない感情；ふたつには、こうした夢のような諸都市が、われわれが現在住むことを余儀なくされている陳腐な都市環境を作り出すことに責任のある人々に大きな影響を与えられなかったことである。博

覧会がもっていた否定的イデオロギーはなおわれわれとともにある。悲しいことにそのファサードの美しさは永遠に無くなってしまったが」<sup>⑧</sup>。

第二の点はさておき、第一の点は痛切にわれわれに訴える力を持つ。なお、ここでの否定的イデオロギーとは人種差別主義のことである。

他方で、文化史家リチャーズ T. Richards は大博覧会と消費文化との関連に眼を向けた。リチャーズの著作は、広告の進化に焦点を合わせ、ヴィクトリア朝イングランドにおける文化的発展とビジネスの発展との相互連関を説明しようとしたものだが、その冒頭の章で大博覧会を取り上げている。リチャーズは、その章のなかで、「大博覧会まで商品は一瞬たりともイングランドの公衆の生活のなかで中心的な位置を占めたことはなかった；大博覧会の間中、そしてその後、商品は旋回する地球の静止した中心となり、そうなり続けた。1851年の大博覧会は商品文化の走馬燈的光景の最初の爆発であった」、という。大博覧会を「スペクタクルの一つの特別な瞬間」と捉え、イギリス消費文化の発展にとって決定的に重要だったと位置づけ、これまでの大博覧会研究に新風を吹き込んだといえる<sup>⑨</sup>。

グリーンハルやリチャーズの著作は、間違いなく大博覧会・国際博覧会研究の必読文献といえるが、当然ながら万博研究としては視点が偏りすぎている。

この世紀末に、大博覧会のもった多様な意味を強調する研究が、あたかも示し合わせたかのように次々と現れた。まずは大博覧会研究にとって決定的に重要な位置を占めるアウアーバック Jeffrey A. Auerbach の著作である。アウアーバックは、これまでの大博覧会についての語りは、ホイッグ的、目的論的であっただけでなく、大博覧会を一連の明白な意味を持った記念碑的で一枚岩的な出来事としても描くものであった、という。だが、こうした理解は、博覧会の多くの多様な意味を単一の、絶対的な真実に還元してしまう。大博覧会は多くの意味を秘めた「変幻自在な出来事」だったとして、アウアーバックはその多くの意味を探り出そうとする。

そもそも、大博覧会についての物語は大きくいえばふたつあった。主催者や、『タイムズ』、あるいは『ロンドン画報』 *Illustrated London News* などが語るものと、こうした公式の物語の水面下にあったものである。水面下の物語を浮上させれば自ずと大博覧会に関する物語は多様なものとなろう。大博覧会はイギリスの経済的先進性を言祝ぐよりも、むしろその欠陥の所在を明らかにし、修正することを意図していた。大博覧会は国際主義的であると同時にきわめてナショナリスティックでもあった。大博覧会を組織し、参加した人々は親工業化でもあり、反工業化でもあった。大博覧会の時期にイギリスのナショナルなアイデンティティが醸成されたが、それによって地方的、階級的、党派的なアイデンティティが排除されたわけでもなかった。また、大博覧会の人気と成功はかなりの時間をかけて主催者側の少数のグループによって作り出されたものであり、その公衆への大博覧会の売り込みの過程で大博覧会の定義も変えられたのだという。「多くの場合、大博覧会は主催者の意図したこととは異なる意味を引き受けた。大博覧会は一連の共有した価値観を体現したが、共有していない価値観の表明を許した。たとえば、アルバートとコールは大博覧会を工芸の製造、あるいは趣味のよい消費主義についてのものにしようとしたが、多くの展示者や入場者にとっては、それは見本市であり、ショッピングモールであり、商業的出来事であった。・・・主催者は大博覧会にイギリス経済の長期的な改善を期待したが、多くの製造業者や商人は短期的な利益の増大のための機会として利用した」。アウアーバックは結論部でつぎのように言う。「大博覧会の意味をひとつに限定して語るのは誤りである。それは多くの

意味を持ち、それらの意味は時代とともに変わるからである」、<sup>⑩</sup>と。

このように、アウアーバックは、大博覧会を多様な意味を持った場として捉えるべきだと主張し、21世紀における万博研究の方向を決定付けた。この同じ1999年に出版された国際関係史のデーヴィス J. R. Davis の著作もほとんど同じ趣旨の見解を展開している。デーヴィスも、これまでの大博覧会の研究が皮相であり、単純化した説明に終始したとし、実際には、クリスタル・パレスは多様な、しばしば対立さえする経済的、社会的、文化的アジェンダの動員される場であったという。しかし、デーヴィスは、大博覧会の意味は多様であるといいつつも、結局は工業化と近代化を支持するモダニストのアジェンダで大博覧会を捉えることになる。彼はつぎのように結論する。

「大博覧会の主要な重要性は、それが工業化の諸力を利用するのを助け、それらを受容させることで、イギリスや世界でそれらを促進したことである。・・・大博覧会の目的は様々であり、しばしば矛盾していた。しかし、全体としては、その目的は工業化を推し進めることであり、これが世紀中葉にはなお見られた障害を打破するのを助けた。この過程は今日に到るまで持続している。・・・大博覧会はわれわれが今日生きている近代的な、工業化社会の創出に劇的に貢献した」<sup>⑪</sup>。

確かに、デーヴィスは、これまでの研究が単純すぎ、皮相なものであったと批判するだけあって、たとえば、中国の展示が、帝国主義的商人の手によってなされ、中国それ自体よりもイギリスの商業的利益に添った中国イメージを作り出すことになったこと、より一般化して言えば、大博覧会での世界のイメージがイギリスを特別好意的に描き、その他の世界を確実に富をもたすが、劣等な所として示すものだったことを指摘し、あるいは大博覧会が極めて保守的なジェンダー関係を反映したものだったことなどを指摘している<sup>⑫</sup>。にもかかわらず、デーヴィスには、モダニストのアジェンダが内包していたはずの、グリーンハルらが指摘した大博覧会と帝国主義との親和性といった問題、あるいはリチャーズの指摘した消費文化との関連などについて考察しようとする姿勢はほとんどみえないのである。

#### 注

① Christopher Hobhouse, *1851 and the Crystal Palace: being an account of the Great Exhibition and its contents, of Sir Joseph Paxton and the erection, the subsequent history and the destruction of his masterpiece*, 1937, pp. 149-50.

② Jeffrey A. Auabach, *The Great Exhibition of 1851: A Nation on Display*, 1999, p. 220.

③ Nikolas Pevsner, *High Victorian Design: a study of the exhibits of 1851*, 1951, pp. 115, 152-153.

④ ヴィクトリア時代への態度、そしてヴィクトリア時代の研究が時代とともにどう変化していくかについては、つぎの文献が極めて有益である。Kelly Boyd and Rohan McWilliam(eds), *The Victorian Studies Reader*, Routledge, 2007.

⑤ Kenneth W. Luckhurst, *The Story of Exhibitions*, The Studio Publications, 1951, p. 112.

⑥ A・ブリッグズ著、村岡健次、河村貞枝訳『ヴィクトリア朝の人々』、ミネルヴァ書房1988年、22頁、44頁。

⑦⑧ Paul Greenhalgh, *Ephemeral Vistas: The Expositions Universelles, Great Exhibitions and World's Fairs, 1851-1939*, 1988, pp. 54, 58-59, 225. ただし、万博と帝国主義、人種差別主義との関係を暴いた研究としては次の著作が先駆的である。Robert W. Rydell, *All the World's Fair*, 1984. この研究はフィラデルフィア万博以降のアメリカで開催された万博を取り上げ、セントルイス万博の人類学部門の展示を担った

W. J. MacGee の人種理論を詳細に紹介するなどして、万博と人種差別主義、帝国主義との密接な関係を明らかにしている。

⑨ T. Richards, *The Commodity Culture of Victorian England*, 1990, p. 18.

⑩ Auerbach, op. cit, pp. 1-4, 228-231.

⑪⑫ J. R. Davis, *The Great Exhibition*, 1999, pp. 105, 162, 216.

## 2, 21世紀の研究動向

21世紀における大博覧会、万博を含む各種国際博覧会研究は、アウアーバックの、大博覧会は多くの意味を秘めた「変幻自在な出来事」だったという認識を前提としてなされていると言ってよいであろう。すでに紹介した帝国主義との関係を重視したグリーンハルも、後の国際博覧会に関する論文では次のように述べている。「多くの点で、国際博覧会は時代を総括した。それらの博覧会は極めて複雑なメカニズムによるものであって、単一の要因によってではなく、利他主義、利益、プロパガンダ、あるいはプライドなど、すべてに同時に突き動かされていた」、①と。

大博覧会の150周年にあたる2001年に出版された文化史家らによる、大博覧会の共同研究によれば、大博覧会はその発端からその意味をめぐって戦われた場であったという。その編者パーブリック Louise Purbrick らは、大博覧会が生み出された歴史的過程を明らかにし、その意味が作られ、管理され、保存された方法を明らかにしようとする。そして、その意味の戦いにおいて、主催者は必ずしも大博覧会の意味を常にコントロールできたわけではなかった、という②。

帝国史の観点から大博覧会などの国際博覧会を研究したホッフエンバーグ Peter H. Hoffenberg も博覧会は、「コンセンサスとヘゲモニーとともに緊張、不安定さ、対立がせめぎ合い、形成される瞬間であった」、という。そして、これまでの研究史を「われわれはコンセンサスの問題から対立の問題へとシフトしてきた」、と概括する。ただし、ホッフエンバーグの主たる関心は、博覧会そのものよりも、博覧会を通して見えてくる大英帝国を定義することになる経済的、社会的、文化的諸力である。かれによれば、博覧会は、ヴィクトリア時代とエドワード時代の帝国的でナショナルな、社会的、商業的企ての中核であった。つまり、博覧会は、この時代の大英帝国内での文化システムの中核にあったというのである。しかし、かれは、博覧会のコレクションと出版物は、帝国的秩序、ナショナルな秩序、知的な秩序、社会的な秩序を表象したが、そうすることでこれらのシステム内の緊張と皮肉をも明らかにした、という。たとえば、帝国的な商業的富の祝福は、植民地にとっては彼らの経済的富を展示し、独立的な貿易の利益を暗示する機会でもあったし、イギリスと植民地の博覧会は、ヴィクトリア時代とエドワード時代の不平の声を誘発したのである。

また、かれは1851年の大博覧会を特権化し、その他の、ロンドンや植民地で開催された博覧会を軽視することを手厳しく批判する。大博覧会の、その後の博覧会、あるいは社会への影響の大きさを否定は出来ないが、大博覧会は博覧会の歴史の中のひとつにすぎないのだ、という③。

大博覧会の100周年にあたるこの年には多くの研究が出版されたが、ジャーナリストによる大博覧会研究も見られる。『タイムズ』の記者だったリープマン Michael Leapman は専門的なものではないが、なかなか興味深い、ジャーナリストならではの臨場感溢れる大博覧

会研究を著した。専門的な書物ではないせいか、本書は大博覧会研究の参考文献にもあまり挙げられないのだが、紹介する価値はある。本書は、サリー州のある村の人々の万博見学の様子を丁寧に紹介したり、あるいは大博覧会の「ヴァーチャル・ツアー」を試み、われわれを大博覧会会場に誘うなど、大博覧会の展示や人々の様子をヴィヴィッドに伝えてくれるのである。本書は、当時の人々が大博覧会をどう受け止めたのかを、当時のガイドブックなどを資料として語り、本書のサブタイトル「1851年の大博覧会はどう国民を形成したのか」が示すように、イギリスのナショナル・アイデンティティと大博覧会との関係に光を当てている。リープマンによれば、タバンやコンサートホール、そして新たに出現しつつあったミュージックホールなどで、この偉大な出来事を賞賛する「国民の大博覧会」、「偉大なるハイパークで」、「シリングデーに大博覧会に行こう」などの歌が歌われ、1851年の夏は国民がひとつになっていたのだという。しかし、リープマンは、どうも大博覧会の影響を過大に評価しすぎているようである。かれは、大博覧会の巨大な、ほとんど経験したことの無かった成功は、この国の生活とそのイメージに何十年も、そして今日に至るまで影響を与えた、という<sup>④</sup>。大博覧会の遺産が今日に至るまで持続していることは確かだろうが、それをあまりに過大視すれば、ふたたび大博覧会を特権化することになるだろう。

大博覧会の背後には王立委員会が控えていたが、この王立委員会に焦点を当てた研究もある。ホブハウスHermione Hobhouseは、王立委員会の成立から今日に至るまでの歴史を辿った。したがって、大博覧会そのものにはさほどページが割かれているわけではない。むしろ大博覧会は、王立委員会の歴史の一齣として扱われている。しかし、大博覧会を準備し、運営する王立委員会の様子が、委員会内での意見の対立や、その地方委員会の動向なども含めて詳細に語られており、やはり大博覧会を多様な意味を持つ物語として語るという流れに位置づけられる研究といえよう<sup>⑤</sup>。

サザビーズの取締役で19世紀の家具の専門家マイヤーJonathan Meyerは、家具に焦点を当てながらも、その関係で装飾芸術にも注目して、1851年の大博覧会、1853年のニューヨーク博、1855年のパリ博、1862年のロンドン博、などの19世紀の万国博覧会を取り上げた。万博の研究としてはいささかバランスが悪く、万博研究の動向に影響するような著作ではない。しかしながら、17才の時に1851年の大博覧会を見て嫌悪したウィリアム・モリスが1861年に設立したモリス・マーシャル・フォークナー商会在、1862年のロンドン万博にいくつかの作品を展示していたなどの興味深いエピソードを紹介している<sup>⑥</sup>。

チルダーズ Joseph W. Childersら3人の文学系の文化史研究者たちを編者とする『ヴィクトリア時代のプリズム』というなんとも印象的なタイトルを持った論集は大博覧会研究に新しい方向性を打ち出したとは言えないが、かれらも大博覧会を19世紀中葉における世界の中核で起こった一義的な歴史的ランドマークであるといった解釈を退け、すでに紹介したアウアーバックの「一つではなく、多くの意味を持つ現象」としての大博覧会という主張をさらに、発展させようとしている。この論集の最も興味深い所は、序文の研究史の整理かもしれない。序文は編者3人の手になるものであるが、かれらは、これまでの博覧会研究に強い影響を与えてきた、大博覧会とモダニティという二つの現象についての支配的なヴィクトリア朝の説明を克服しなければならない、という。そのためには、たとえば、ブリッグズの『ヴィクトリア朝の人々』に見られるような大博覧会の評価を額面通りに受け取ってはならない。その評価は、「アルバート公や彼を支持するヴィクトリア時代の自由党系の新聞が述べた意図と派手な誇大宣伝が、しばしば大博覧会が実際に達成したこととして、



そしてそれが究極的に意味したこととして受け入れられた」、結果であるからである。彼らが目指すのは、「われわれの大博覧会の描写に経験、アジェンダ、そして決定要因の多様性を回復するだけでなく、大博覧会とその豊富な遺産の再評価を、モダンティそのものをそのもっとも広い意味において再評価する機会ともしたい」ということである。

またかれらは、1951年から2000年にかけての研究には、各世代で順次再生された「ストレイチー流の反ヴィクトリア朝主義」を見て取ることが出来るともいう。具体的には、すでに紹介したグリーンハルやリチャーズなどの研究を取り上げている<sup>⑦</sup>。先にも触れたが、反ヴィクトリア朝主義は、1951年頃には終焉を迎え、それ以降はむしろヴィクトリア朝時代をそれなりに評価しようとする傾向が出てくる頃である。それゆえに、こうした理解にはやや違和感を覚えるのだが、仮に大博覧会とクリスタルパレスを確固たる歴史のランドマークとする見方への手厳しい批判を「ストレイチー流の反ヴィクトリア朝主義」だとするならば、こうした見方も可能かもしれない。そして、本書序文でのこの部分が興味深いのは、最新の万博研究の著作に、この部分とは逆方向の流れを見て取ることが出来るかもしれないからである。つまり、大博覧会研究にある種の揺り戻しが起きているかに見えるのである。

まずは2008年に出版された、すでにその著書を紹介したアウアバックとホッフエンバーグを編者とする『イギリス、帝国、そして1851年の大博覧会の時点での世界』である。この論集は、大博覧会をグローバルな文脈において考察することで新しい方向性を打ち出そうとする。

「本書は、大博覧会の意味と重要性についての議論を、さらに深め、それをただナショナルな、あるいは帝國的な文脈ではなく、初めてグローバルな文脈で考察する。・・・大博覧会は、要するに、イギリスを彼らの帝国とより広い世界の文脈で位置づけることを可能にした」。

「これらの商品や情報の交換は、しかし一方的なものではなかった。イギリスが世界を表象するのに大博覧会を使つたとすれば、植民地や他国も博覧会を自らを表象するのに使った。つまるところ、大博覧会は単にイギリスの出来事だったのではなく、真にグローバルな出来事であった。ロンドンの主催者は明らかに自らのアジェンダを持っていたが、イギリスの白人移住植民地と貿易パートナーとの関係は複雑で、多層的であり、ヘゲモニーの主張と言うよりも遙かに交渉の産物であった。諸国家と植民地はともに大博覧会を自らの目的のために利用出来、かくして大博覧会的主催者のヴィジョンが最終的にはいかに限定的で、利己主義的であったかを示す。大博覧会を中枢からだけでなく、周辺からドイツ、ロシア、オスマン帝国、中国一からも見たとき初めて19世紀中葉におけるイギリスのグローバルな関係が全面的に理解できる」<sup>⑧</sup>。

大博覧会はまさに「万国の産業製作品大博覧会」なのだから、グローバルな出来事であったのは当たり前のことである。だが、これは「真にグローバルな出来事」であったというのである。そして、その意味するところは、中枢と周辺の双方向からみて初めて分かるというのである。本書ではインドは取り上げられていないので、この中枢と周辺の双方向からの大博覧会の分析には非常に限界があるものの、ここでは、大博覧会をグローバルに捉えようとしつつも、決してヘゲモニックな物語にしているわけではない。つまり、ここにはまだ「揺り戻し」といえるような動きはない。

だが、つぎの著作は、このグローバルな文脈での考察をヘゲモニックな物語に作り上げ

てしまう。ここに、先に述べた「揺り戻し」がはっきりと見られるのである。文化史家ヤングPaul Youngの著作である。この著作もグローバルな文脈で、つまりグローバリゼーションとの関係で大博覧会を捉えようとする。ヤングの言うグローバリゼーションとは、地球上のすべての社会が自由で開放的と考えられる世界経済に統合されてゆく過程、19世紀中葉の産業資本主義の拡大によって進展する過程、世界の縮小と世界の全体性の認識が強化されることによって特徴付けられる過程である。

ヤングは、これまでの研究史を振り返り、つぎのように言う。

「近年の大博覧会の研究者が、この出来事を単純な、勝利史観で解釈することに懐疑的であることは正しいが、われわれはこの展示が、世界と、そしてその中でのイギリスの地位についての単純で、勝利観に満ちたヴィクトリア朝的な解釈に手を貸したという事実にも止目し続けねばならない」、と。

大博覧会の単純な理解は避けねばならないが、そうした理解を生み出したこの出来事の力を見逃してはならないということのようである。結局ヤングが言いたいのは、「わたしはここで、クリスタルパレスは、当時世界中で完璧に作動していた単一のヘゲモニックなグローバリゼーションの振付けをするのに貢献した、などと主張するのではない。わたしが言いたいのは、本書が大博覧会の展示と結びつけた時間的、空間的な美学と政治と、グローバリゼーションのヘゲモニックな形が大博覧会閉幕後に存続したという事実との間につながりがあるということである」。

何ともわかりにくい表現である。結論を先取りすれば、ヤングは大博覧会についての単純な理解を避けるべきだとしつつも、結局は単純な理解に可能な限り回帰したいのである。ところが、その回帰は単純であってはならない。そのために、何とも微妙な言い回しになってしまうのである。

だが、結論部の「アメリカ、アングローバリゼーション、大博覧会」はもう少し歯切れがよい。まず、アングローバリゼーションについて説明しなければならない。この用語は2003年に出版された『帝国』でかなりの物議を醸しだしたファーガソンNiall Fergusonのもので、砲艦外交などの手段を用いつつ非ヨーロッパ世界を巻き込んだ近代のグローバリゼーションのことである。ファーガソンによれば、この帝国的なアングローバリゼーションは、善か悪かという問いをたてれば、善だと判断しうると言う。というのも、帝国の遺産は、ただ人種主義、人種差別、外国恐怖とそれに関連する不寛容ではなく、アングローバライズされた世界であったからである。そこでは、自由主義的民主主義、法の統治、キリスト教、チーム・スポーツ、英語を含む文化的・制度的現象の相互に関連する流れとともに、資本主義は経済組織の最上のシステムとして勝利したのである<sup>⑩</sup>。そして、ヤングにとって重要なことに、この過程の起点が大博覧会なのである。1851年＝大博覧会こそが「アングローバリゼーションの中核での歴史の最も重要な年であった」のである。

もっとも、ヤングはつぎのようにも主張する。

「大博覧会は不平等で、差別的な権力関係を記録しただけでなく、支持するのを助けた。大博覧会の中核にあったグローバルな幻想－わたしの言うヴィクトリア朝的な新世界秩序であり、ファーガソンの言うアングローバリゼーション－は、確かに人種主義、搾取、暴力を促進することを意図したものではなかった。しかし、同時に、クリスタルパレス後に現れた近代世界を特徴づけたのは人種主義、搾取、暴力であったという事実からそれを切り離すこともできない」<sup>⑪</sup>。

ファーガソンは、アングローバリゼーションの過程を、総合的に判断すれば、善なるものであると言い切るのだが、ヤングはその判断にやや含みを持たせている。つまり、その判断はもう少し複雑であることを示唆するのである。

ヤングの主張は、つぎの節でさらに取り上げよう。

#### 注

- ① Paul Greenhalgh, "The Art and Industry of Mammon: International Exhibitions, 1851-1901", p. 279. (John M. MacKenzie, ed., *Victorian Vision*, 2003).
- ② Louise Purbrick, ed, *The Great Exhibition of 1851*, 2001.
- ③ Peter H. Hoffenberg, *An Empire on Display*, 2001, pp. xv, 8, 14.
- ④ Michael Leapman, *The World for a Shilling: How the Great Exhibition of 1851 Shaped a Nation*, 2001. pp. 5-20, 133-163, 207, 252.
- ⑤ Hermione Hobhouse, *The Crystal Palace and the Great Exhibition: art, science and productive industry: a history of the Royal Commission for the Exhibition of 1851*, 2002.
- ⑥ Jonathan Meyer, *Great Exhibitions: London, New York, Paris, Philadelphia*, Antique Collectors' Club, 2006.
- ⑦ James Buzard, Joseph W. Childers, and Eileen Gillooly, (eds), *Victorian Prism: Refractions of the Crystal Palace*, 2007. pp. 1-12.
- ⑧ Jeffery Auerbach & Peter. H. Hoffenberg, (eds.), *Britain, the Empire, and the World at the Great Exhibition of 1851*, 2008, pp. x, xviii.
- ⑨ Paul Young, *Globalization and the Great Exhibition: The Victorian New World Order*, 2009, pp. 4-6, 15.
- ⑩ Niall Ferguson, *Empire: How Britain Made the Modern World*. London: Allen Lane, 2003, pp. xxi, xxvii. 本書はまたつぎのタイトルでも出版されているが、中身は同一である。*Empire: The Rise and Demise of the British World Order and the Lessons for Global Power*, New York, Basic Books, 2003. 本稿ではサブタイトルにこだわり、前者の版を使用する。ついでに言えば、後者の版は、サブタイトルが示すように、大英帝国は今日のアメリカにとって多くの教訓を与える存在であったと主張するものである。
- ⑪ Paul Young, op. cit., pp. 200-202.

### 3、大博覧会とアングローバリゼーション

さて、ここで改めてファーガソンの著書を紹介しておこう。彼の著書は『帝国: イギリスはいかにして近代世界を創ったか』である。ファーガソンによれば、近代世界を創出したのは大英帝国なのである。この大英帝国による近代世界創出の過程こそがグローバリゼーション、すなわちアングローバリゼーションにほかならない。そして、この過程は人類にとっては、善と悪のバランスを考えれば、善の方が大きかったのだという。

『帝国』の課題はふたつ。ひとつはヨーロッパの島国イギリスがどのようにして世界を支配することになったのかである。今ひとつは、「帝国は善だったのか、それとも悪だったのか」である。もちろん、後者の方が遙かに判断の難しい問題である。ファーガソンは、「全体として考えれば、帝国は悪であった」とする今日の常識的理解に挑戦する。かれにしても奴隷貿易や奴隷制度を擁護することはできない。だが、かれはすでに見たように、「帝国の遺産は『人種差別主義、人種による分け隔て、外国人恐怖症とそれに関連する不寛容』だけではなかった」として、帝国を擁護する。しかも、ここがかれのうまいところなのだが、この一文の後に、「それらは、植民地主義の遙か前から存在していた」という一

節を加えることを忘れない。ファーガソンは、どうも帝国の悪の部分に極力狭く限定したいようである。

では、帝国は善だとして、何をしたというのか。彼はつぎの諸点を列挙する。「最適な経済制度としての資本主義の勝利；北アメリカとオーストラレーシアの英国化；英語の国際化；プロテスタントの持続的影響；とりわけ、1940年代に悪辣な諸帝国が消滅させようとした議会制度の延命」である。ファーガソンは、帝国を擁護したいのだが、その帝国とは、もちろん大英帝国である。この一文に出てくる「諸帝国」は彼の擁護の対象ではない。かれは大英帝国をこの「諸帝国」と比較することで、大英帝国の、善なる帝国としての抜きん出た業績を誇示する。自由の観念をもって帝国統治を行ったなどの、大英帝国の業績を挙げ、つぎのように言う。「他の諸帝国は同じことをできたであろうか。疑わしいと思われる」、と。「ドイツ帝国や日本帝国などの大英帝国に取って代わった統治は、明らかに遙かにひどいものであった」。日本人にとって気になるのは、南京大虐殺を取り挙げた部分であろう。26万人から30万人の非戦闘員が殺され、8万人の中国人女性がレイプされたのだと、南京大虐殺について説明した後で、ファーガソンは言う。「これは最悪の帝国主義であった。だがこれは日本の帝国主義であり、イギリスの帝国主義ではなかった。南京大虐殺は、アジアでのイギリスの統治に取って代わったものが何を意味したかをはっきりと示している」<sup>①</sup>、と。

わたしは、南京大虐殺をでっち上げだなどとは思わないし、よく問題にされる犠牲者の数にしても、中国側が30万だというのであれば、それを日本側が否定するのは難しいだろうと考える。しかしながら、ここまでして大英帝国を持ち上げなければならないのか、とも思うのである。たしかに、大英帝国は、商品、資本、労働の自由な流通を促進し、西洋の法と秩序を世界に広めるのに多大な貢献をしたかもしれないし、大英帝国にはその活動を支える観念、つまり文明化の使命があっただろう。だが、そうした主張をもって、イギリスの帝国主義も日本の帝国主義も、所詮は同じ穴の貉であるといった議論にどこまで対抗できるであろうか。

ファーガソンの著書の書評をしようというわけではないので、この辺で大博覧会に戻ろう。ファーガソンは大博覧会にはほとんど言及していない。『帝国』のなかで大博覧会に触れているのはつぎの箇所だけである。「かつては国際的で、教育的とされていたもの(1851年のアルバート公の大博覧会がその原型であった)が、1880年代までにはより帝國的で、享乐的になりつつあった」<sup>②</sup>。ファーガソンは大博覧会にそれほど大きな意味を持たせてはいないようである。この点がヤングには不満なのである。ヤングは、ファーガソンの主張を紹介しつつ、つぎのように不満を漏らす。「こうした主張を全面に出しながら、ファーガソンが大博覧会にぞんざいにしか触れていないのはいささか驚きである」<sup>③</sup>、と。ファーガソンの大博覧会への言及は先に見たように確かにぞんざいという他はないだろう。ヤングの著書は「1851年がアングロバリゼーションの中枢での歴史のなかでおそらく最も重要な年であったこと」を明らかにするものであった。つまり、ヤングはファーガソンのアングロバリゼーションの主張をほとんど認めているのである。であるがゆえに、ファーガソンがその起点である大博覧会の重要性をまるで認めようとしていないことが、不可解かつ、大いに不満なのである。

ヤングは、ケインとホプキンスPeter Cain and Anthony G. Hopkinsのジェントルマン資本主義論にも触れている<sup>④</sup>。ブルジョワは自らのイメージで世界を創造するというあまりにも有

名なマルクスとエンゲルスの『共産党宣言』の一節を紹介しながら、ヤングはつぎのように言う。

「『共産党宣言』の分析に照らせば、本研究は、大博覧会がこの膨張主義的衝動を促進すると同時に、それをメトロポリタンな聴衆に正当化するのにも役立った、と主張する。この意味で、大博覧会は次のようなケインとホプキンスの最近の主張にとって重要になる。帝国主義と帝国の研究が世界史、とくにグローバリゼーションの歴史の中心に据えられねばならないという主張である。ここで彼らはとくに近代のグローバリゼーションを強調する。その過程は、1850年に始まり、国家の国民国家への変容と、非ヨーロッパ世界への金融的、産業的革命の発展の衝撃によって定義される」<sup>⑤</sup>。

ここでもヤングが主張したいのは、ケインとホプキンズが言う1850年を起点とする近代のグローバリゼーションにとっての大博覧会の重要性であろう。

ファーガソンのアングローバリゼーション、ケインとホプキンズの近代のグローバリゼーションにとって、大博覧会が極めて重要なのだというのが、ヤングの主張である。

冒頭で述べた気になる点というのは、ヤングとファーガソンの主張の親和性である。ファーガソンの主張は、すでに見たように、大英帝国こそが近代世界を創出したのであり、その過程で多少の問題は発生したが、そこに出現した世界は人々を十分に満足させるものであったとして、かなり強引に大英帝国の偉業を礼賛しようとするものであった、といえる。ここでどうしても先に紹介した、グリーンハルの「結局の所、国際博覧会は、その肯定的な側面をもってしても拭い去ることが出来ない困惑をわれわれに残す。・・・」というあとがきの一文を再度引用したくなる。

ファーガソンとグリーンハルの落差はきわめて大きい。ファーガソンは、国際博覧会についてはほとんど何も触れていないが、先に見たように、国際博覧会と帝国主義との関わりはある程度は分かっているようである。だが、ここに紹介したグリーンハルの主張にファーガソンが賛同することはないだろう。もちろんヤングはファーガソンの側にいる。

現在のイギリスにおいて大英帝国の業績をグローバリゼーションの観点から改めて見直し、その過程の決定的ファクターとして大英帝国を称える、その際大英帝国にかかわる負の遺産は可能な限り軽視する、そういう流れが顕在化しつつあるのではないだろうか。ファーガソンにはどうでもいいことのようにだが、ヤングはその過程のランドマークとして大博覧会を置きたいのである。ファーガソンとヤングの違いは、近代のグローバリゼーションの決定的要因として、まずもって大英帝国をあげるか、それとも大博覧会を挙げるかの違いだけである。いずれにしても、近代世界の形成におけるイギリスの決定的重要性を改めて強調し、それを今日ではあまりはやらない「大きな物語」に仕立て上げようとするところはまったく同じである。「帝国史的転回imperial turn」とも称される新しい帝国史研究の流れを論評したリチャード・ブライスは、ファーガソンの議論を「ネオコン的議論」と断じ、「ファーガソンは最近の歴史家には珍しい熱狂を大英帝国に示している」<sup>⑥</sup>、と言う。これに倣えば、ヤングは最近の歴史家には珍しい熱狂を大博覧会に示していると言えようか。だが、かれらの言動は「珍しい」のだろうか。

彼らの論には自らの過去に対する、いわば開き直りが見られる。ここにみられる開き直りは、西洋の敵、かつての神風特攻隊や、とりわけ現在のオサマ・ビン・ラディンなどのイスラム勢力を徹底的に非合理的な、狂気じみた存在として描くことで、少なくとも結果的にはオリエンタリズムを肯定してしまったブルマとマルガリット Ian Buruma and Avishai

Margalitの『オクシデンタリズム』に通じるものがある<sup>⑦</sup>。ファーガソンも、この二人組も、大英帝国の過去、西洋の過去のマイナスの側面には甘く、むしろその業績を賛美することに意を用いているように思われる。ファーガソンは単純に、この二人組は敵を徹底的に貶めて、間接的に自らを浮かばせるというより複雑な方法で。奇しくも、ファーガソンの著書も、この二人組の著書も、『タイムズ』、『エコノミスト』あるいは『ワシントン・ポスト』などの英米圏の商業紙での書評は極めて好意的である。こうした主張に迎合しようとする土壤が英米圏にあるのだろうか。

大博覧会に戻れば、その土壤にヤングが近代のランドマークとしての大博覧会を植え付けようとしている、と言えよであろうか。

#### 注

① Niall Ferguson, op. cit., pp. xxi, xxvii, xxiv, 339, 366.

② Ibid., p. 257.

③ Paul Young, op. cit., p. 200.

④ Peter Cain and Anthony G. Hopkins, *British Imperialism: 1688-2000* (2nd Edition), 2001, pp. 661-680. ヤングが取り上げているのは第二版で新たに加えられた「あとがき 帝国とグローバリゼーション」である。ここでケインとホプキンスはグローバリゼーションの歴史を、1688年から1850年のプロト・グローバリゼーションの段階、1850年から1950年の近代のグローバリゼーションの段階、そして1950年以降のポスト・コロニアルのグローバリゼーションの3段階に分けて論じている。

⑤ Paul Young, op. cit., p. 9.

⑥ Richard Price, "One Big Thing: Britain, Its Empire, and Their Imperial Culture", *Journal of British Studies*, 45 (July 2006), pp. 602-627.

⑦ Ian Buruma and Avishai Margalit, *Occidentalism: The West in the Eyes of Its Enemies*, 2004. かれらは「現下の西洋の敵を悪魔化」(p.11)することが目的ではないと断っているのだが、かれらの「西洋の敵」の描き方は彼らの断りを裏切っているように思われる。とはいえ、かれらに言わせれば、「西洋の敵」は西洋の内部にもあるのだが、かれらの西洋内部の「西洋の敵」の描き方は確かに「悪魔化」しているようには見えないけれども。